



「野菊は ものをいわないけれど 寒さの中で  
美しくさいているのを見ると おじいちゃんの心  
を動かした」

『大石法夫先生直筆書信集』上巻一五一・樹心社刊『生ま

れてよかったですか』一三頁より)

【発題】 心光寺住職 宮岳文隆（釈文龍）

■ こんにちは。雨天の中をご遠方からお参り下さいまして本  
当に有難うございます。

今年頂きましたある先生（高柳正裕師）からの年賀状の中に  
に、次のようなお言葉がありました。

蓮如上人のいわれる『かご』とは、自分自身のこと  
であることをいよいよ実感している毎日であります。

これは『蓮如上人御一代記聞書』の中に、次のような問答が  
出てきます。

人の、こころえのとおり、申されけるに、「わがこころ  
は、ただ、かごに水を入れ候うように、仏法の御座敷に  
ては、ありがたくもとうとくも存じ候が、やがて、もと  
の心中になされ候う」と、申され候う所に、前々住上人  
（蓮如上人）、仰せられ候う。「そのかごを水につけよ」と。  
わが身をば法にひてて（漬けて）おくべきよし、仰せられ

候う。(真宗大谷派『真宗聖典』八七一頁)

ある方が「私の心は籠かごを水に入れたようなもので、仏法を聞く時はなるほどと思うが、聴聞の場を離れると、聞いたことをみな忘れてしまつて元の木阿弥になつてしまいます」と蓮如上人に苦しみを打明けたところ、上人は「その籠かごを水につけておけばよいではないか」と答えられたと、そういう問答です。

この問答を受けてこの先生は、「蓮如上人のいわれる籠かごとは自分自身のことであるといよいよ実感している毎日であります」と、こういうふうに書いておられたのです。自分は籠かごだからつけておくしかない。そこからちよつとでも持ち上げるのとたちまち教えは抜けてしまう。それが自分だということをいよいよ実感している毎日だと、そう書いておられる。「毎日」ということですから、そのことを生活の根底にすえて、日々新たにそのことを頂きつつ、生きておられるということですね。こんなふうに書いておられるわけです。尊いなと思ひました。

これを読ませて頂いて、このお話は蓮如上人が人に向かつて言っているのではなくて、上人ご自身が、自分は籠かごだと身に沁みて思っておられた言葉なんだなあということに気づか

せて頂きました。

同じく『蓮如上人御一代記聞書れんじょうしやうにんごいちだいきききがき』に、上人が病で臥ふせつておられた時にお弟子さんに『御文おふみ』を読んでもらつて、それをしみじみ聞かれて、「わがづくりたる物なれども、殊勝なるよ」と感激なさつたという記述が出てきます。(『聞書』第八十九)これも蓮如上人が、ご自身をつねに法の水につけていこうとしておられたことを具体的に表すエピソードだと思います。蓮如上人にとつては、『御文おふみ』の言葉は、自分が書いたものではあつても自分のものではないわけです。もし自分のものであれば、味わいたいときにいつでも思い出して味わえるから、別に読んでもらわんでもよいわけです。しかし蓮如上人において、『御文おふみ』の言葉は自分のものでなかつた。だから「自分はつねに法の水にひたしておかんと水が抜けていく籠かごなんだ」と、こう自覚されて、病の床の中にあつても、『御文おふみ』を読んでもらつて、「有り難い」と感激なさつたわけです。蓮如上人において『御文おふみ』は、そのようにして身を法の水にひたすことによつて聞こえて来た如来の呼び声だったのでしようね。

自分はほんとうに水の抜けていく籠かごなんです。しかし籠かごということが、よくよく頂いてみると有り難いことだなあと

いうことを、この年賀状の言葉によって教えて頂きました。

■ さて今日は第十三信を拝読しましたが、この中からいくつか感じさせて頂いた所を取り上げてみたいと思います。

最初の頁にお母さんの白寿のご挨拶の言葉が出てきます。その中で、

長い一生の内には海山の苦しい事もありました。又楽しいかずかずもありましたけれども皆夢の又夢でありました。さめて残ったのは只尊い本願にあり、お念仏一つを頂いてお慈悲を喜びながら毎日暮すことです。誠に勿体ないやらうれしいやら、世を超えた幸福とあります。この世に人間として生れてきた本懐だけとげたとと思う次第です。(『大石法夫先生直筆書信集』上巻二七

頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇七頁)

と話しておられます。これを読んで、蓮如上人の『御文』の四帖目四通のお手紙を思い出しました。蓮如上人がこのお手紙を書かれたのは文明九年十二月と後に出てきます。蓮如上

人六十四歳の時です。

それ、秋もさり春もさりて、年月をおくること、昨日もすぎ今日もすぐ。いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえず、しらざりき。しかるにそのうちには、さりと

も、あるいは花鳥風月のあそびにもまじわりつらん。また歓楽苦痛の悲喜にもあいはんべりつらんなれども、いまにそれともおもいだすこととは、ひとつもなし。ただいたずらにあかし、いたずらにくらして、老いのしらがとなりはてぬる身のありさまこそかなしけれ。されども今日までは無常のはげしきかぜにもさそわれずして、わが身ありがおの体を、つらつら案ずるに、ただゆめのごとし、まぼろしのごとし。いまにおいては、生死出離の一道ならでは、ねがうべきかたとはひとつもなく、またふたつもなし。これによりて、ここに未来悪世のわれらごときの衆生を、たやすくたすけたまう阿弥陀如来の本願のましますときけば、まことにたのもしく、ありがたくもおもいはんべるなり。

(真宗大谷派『真宗聖典』八一七頁)

歳月がどんどん過ぎていって、いつの間にもこのように年を重ねてきたのか。このように年々老いていく身であるということに無自覚でうかうかと暮らしてきた。そうであっても「そ

のうちには：花鳥風月のあそびにもまじわりつらん」。秋の紅葉や春の桜を楽しんだこともあった。「また歓楽苦痛の悲喜にもあいはんべりつらん」。楽しい遊びに我を忘れたり、悲しみに泣いたりしたこともあった。けれども今となつては「おもいだすこととは、ひとつもなし」。いろいろあったけれども、みんな過ぎてしまった。「いたずらにあかし、いたずらにくらして」、気がついてみたら「老いのしらがとなりはてぬる身もありさまこそかなしけれ」。蓮如上人がそのようにおしゃつておられるわけですね。

そして次のように続きます。「されども今日までは無常のはげしきかぜにもさそわれずして」、いつ亡くなつてもおかしくない乱世無常の世において、ともかくこの歳まで生きてきた。そういうわが身の過ぎ来しかたを静かに振り返つてみると、「ただゆめのごとし、まぼろしのごとし」、一生涯はまことに夢、幻のようなものであると。そういう中で今更のようにつくづくと感じるのは、「いまにおいては、生死出離しょうじしゅつりの一道ならでは、ねがうべきかたとはひとつもなく、またふたつもない。これによりて、ここに未来悪世あくせのわれらごときの衆生を、たやすくたすけたまう阿弥陀如来の本願のましますときけば、まことにたのもしく、ありがたくもおもいはんべるなり」と。

これは大石先生の母さんの白寿の時のお言葉と全く同じですよね。長い人生を振り返つてみると、いろんなことがあった。先生のお母さんも「長い一生の内には海山の苦しい事もありました」と。大石先生が話しておられましたけど、大石先生のお母さんは、結婚式の前夜、お通夜のようにであったと。昔は本人の意志に関係なしに、親同士の意向で結婚させられるのが普通だったんですね。また結婚生活でもいろいろなことがあった。お子さんを八人もうけられたが、必ずしも幸せなことばかりとは言えなかったようです。だからお母さんは、大石先生が旧制中学四年生の夏休みに郷里に帰省した時、「法夫さん、あんたはお坊さんにならんね」、「わたしはね、あんたがお坊さんになつて、わたしに法をきかせてくれて、わたしを救うてくれたらよいがと思うのじゃがね」と突然大石先生に言われた。このことは先生がよく話しておられたことです。それだけ、お母さんの中に苦しみがあったということでしょう。

特にお母さんにとって何より辛かったのは、三男の薫さん（京都大卒―軍医）が戦死されたことでしょう。この時、本当に身を切られる辛さを味わつておられる。そういう辛いことがいろいろあった。そのようなことが背景にあつて、「長い

一生のうちには海山の苦しい事もありました」と言っておられるわけです。

しかし今となつてはそういう苦しかった出来事も、また楽しかった数々のことも、「皆夢の又夢でありました」と。そして「さめて残ったのは只尊い本願にあい、お念仏一つを頂いてお慈悲を喜びながら毎日暮すことです。」と話しておられます。九十九年という長い人生を過くわして来られたお母さんに、最後に残ったものはこれだったのですね。

親鸞聖人も最後の床に就かれてからは、

口に世事をまじえず、ただ仏恩ぶつとんのふかきことをのぶ。

声に余言よごんをあらわさず、もつぱら称名たゆることなし。

(覚如『御伝鈔』真宗大谷派『真宗聖典』七三六頁)

とそのご様子が伝えられています。全く同じことを先生のお母さんも言っておられるんですね。

私は六十一年が過ぎましたけれど、最後に一体何が残るだろうかと思ひます。先生のお母さんが言われたようなものが本当に残らなかつたら、「ただ過ぎて来ただけだなあ」ということしかない。そういうのを空過くわという。安田理深先生は「人生において空過くわほど悲惨なことはない」と言われていま

す。空過くわ—空しく過ぎる。どんなに成功し楽しく有意義な人生を過くわしたといつても、それだけだったら結局は空過くわで終つてしまうんですね。そういう中で、蓮如上人にしても、大石先生のお母さんにしても、「さめて残ったのは本願に出遇い、お念仏一つをいただいたことです」と言っておられる。本当にこの一点がなかつたら、たとえどんなに成功しても、どんなに有意義な人生であっても、また反対に苦労ばかり絶えなかつた人生であつても、結局みな空過くわで終わった一生涯えいということになるわけですね。

この空過くわということについて、親鸞聖人は、

観佛本願力

遇無空過者

能令速満足

功德大宝海

(仏の本願力を観ずるに)

(遇むうて空しく過すぐる者なし)

(能く速やかに)

功德の大宝海を満足せしむ)

(真宗大谷派『真宗聖典』一三七頁)

という天親菩薩の言葉をとりあげて、本願に出遇くわえば空過くわとすることがないとおっしゃっておられます。これは天親菩薩の『願生偈』に出てくるお言葉ですね。天親菩薩は『願生偈』の中で、お浄土のはたらきを二十九種に分けて讃えておられ

ますが、その一番中心になるのが、不<sup>ふ</sup>虚<sup>こ</sup>作<sup>じ</sup>住<sup>じ</sup>持<sup>ち</sup>功<sup>く</sup>徳<sup>とく</sup>と名<sup>な</sup>づ<sup>く</sup>けられたこのはたらきですね。このはたらきについて親鸞聖人は、『尊号真像銘文』の中で次のような註釈をして下さっています。

「観佛本願力 遇無空過者」というのは、如来の本願力をみそなわずに、願力を信ずるひとはむなしく、ここにとどまらずとなり。

〔尊号真像銘文〕真宗大谷派『真宗聖典』五一九頁

「ここ」というのは、様々の苦悩に遇うこの娑婆世界のことですね。つまり苦悩の娑婆世界にとどまるというこの身の事実は変わらない。しかしながら空しくとどまらなさと。とどまるのを避けることはできないけれども、空しく終らないということですね。

第十一信の中に、自死を決行して一命を取り止めたご婦人のことが出てまいりました。そういう辛いことも我々の人生にはある。また逆に天にも昇るよううれしいことや楽しいこともある。しかしそれだけだったら、それらが全部空しくなるわけです。しかし本願力に遇うということがあれば、それらの一つ一つが「むなしく、ここにとどまらず」と。「ここ」

というのは我々が日々経験する宿業の人生ですね。それが本願力に遇わないと、全部空しく終わってしまうわけですね。しかし本願力に遇うということにおいて、いろんな業に遇うことの全体が無駄なことではなくなる。実を結ぶ。つまり道になつていくということですね。

先ほどのようなご婦人は、大石先生に差し上げたお手紙の中で、「私の人生も無駄な人生ではなかったのですね」と書かれていました。本願にはそう言わせる力があるということですね。

「能令速満足 功德大宝海」というのは、能はよしという、<sup>のうりようそくまんぞく</sup> 令はせしむという、<sup>くどくだいほうかい</sup> 速はすみやかにとしという、よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人の、そのみに満足せしむるなり。如来の功德のきわなくひろくおおきに、へだてなきことを大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしと、たとえたてまつるなり。〔尊号真像銘文〕真宗大谷派『真宗聖典』五一九頁

ここにありますように、「信ずる人の、そのみに」ですね、大海のへだてない水のような大宝海をたちまち満足させると。こういうふうには、ちよつと大袈裟でないかと思うような言い方

まで親鸞聖人はなさっておられます。そういう大宝海だいほうかい、宝の海をですね、「そのみに」、つまり我々のこの身に満足させる。この場合の身というのは宿業の身ですよ。ですから先ほどのご婦人の身の上を起こったような出来事もみな含まれてくる。楽しい事もあれば苦しい事も、死んでしまいたいような事も起きてくる。そういう宿業の身に、功德の大宝海だいほうかいを満足させるということですね。

ということとは、大宝海だいほうかいといわれるようなその功德は、一体何についての功德かということですね。それは宿業のこの身が持つておる功德ということになるんですね。自分の宿業の身と別な所にある功德ではない。何かこの身を外してですね、自分の身はつまらんけども、本願に遇えば、本願の中にそういう素晴らしいものがあると、そういうことではない。本願に遇わせてもらうというと、その本願は、我々の宿業の身が持つておる、このような大海たいかいのような功德というものを教えて下さると、こういうことではないかなと思います。そういうことが本願力ということなのではないかと思えます。

■この前私は、ある本を探すために本箱をあちこち見ていたら、昔書いた覚書おぼえがきが出てきました。覚書おぼえがきの日付を見ると平

成十二年一月十六日となっていたので、大石先生にお会いする約十一ヶ月程前のものです。実はそれより大分以前のことですが、日野敬三という作家が書いた「ポプラ」という題の短いエッセイが新聞に載っていました。私はそれを読んだ時何かを感じたようで、それを切り抜いておいたんですね。その後そのことはすっかり忘れていました。ところがそれから大分たった頃、探し物をしていてる時その切抜きが出てきて、その切抜きをノートに張って、感じたことを余白に走り書きしておいた。それがこの覚書おぼえがきです。今から十三年程前に書いたものです。それが先日出てきたわけです。

まず先に、日野敬三氏の「ポプラ」を読んでみます。

#### 【日野敬三氏の「ポプラ」朗読】

(次頁に新聞切抜き掲載)



日野 啓三



ひの・けいぞう 一九二九年、東京生まれ。東大卒。読売新聞記者として、ベトナム、

五歳のとき「朝鮮」（いまの韓国）に家族と共に渡った。長く心細い旅だった。初め大邱市の郊外に住んだ。初めてポプラを見た。細長くひっそりと空に向かって立っていた。

私は絵を描くのが好きだった。小学校に入ってから、秋の暮れに黄ばみかけたポプラをクレパスで写生した。その絵を教

韓国特派員などを経て作家に。作品に『階段のある空』『砂丘が動くように』『台風の眼』など。

師が児童画展覧会に送った。子供の絵にしてはうますぎるし、さびしすぎると言われて返された。

その後、小、中学校と「朝鮮」の幾つもの町と都市を移り

## ポ プ ラ

住んだが、どこでもポプラがあった。裏側が少し白っぽい小さな葉が、いつも風に鳴っていた。

そして敗戦の年の冬の初め、引き揚げ列車で釜山港へ向かった。十六歳だった。焦土の「内地」で生き直すのが恐ろしかった。貨車の小窓から、荒野の中に葉の落ちたポプラの大木が一本、夕日に金色に輝いているのが見えた。生きてゆこうと思っ

た。「内地」でポプラは滅多（めった）に見かけなかったが、このころ菱（な）えるとき、しばしい。

は荒野に立つポプラを思った。あとになって外国に出るようになってから、ユーラシア大陸の幾つもの土地で再びポプラに出あった。トルコの地方都市の郊外で、タクラマカン砂漠のオアシスの町で。こころの芯（しん）が静かに立った。

カスタネダの本の中に、インディアン（インディアンの呪術（じゅじゅつ））の師が「死ぬとき戦士の魂は、自分の場所（ばしょ）にかえって、ひとりの最後の踊りを踊る」と言ったと書いてある。夕日に輝くポプラの下で「最後の踊り」を踊りた

皆さんどうお感じになりましたか。何か私はこの文章が心に残ったとみえて、切り抜いて覚書を書いていたんですね。  
おぼえがき  
次にその覚書も読んでみます。

「探し物をしていて、ずっと前に、琴線（きんせん）に触れるものを感じて切り抜いたまま、長いこと忘れていた日野敬三氏の「ポプラ」という随想が出てきた。再び読んで、改



めて深く私の心に沁みていくものを感じた。

この作家は、心の一番奥で、荒野に一本立つポプラの姿に生きる力を与えられてきたのだった。人はこうして植物の命に励まされ、根本的な生きる力を静かに与えられるということがあるのだと思う。

その時私は、以前聞いた野尻千穂子さんの講演を思い出した。この人もまた、生きる力を失おうとした十七歳の春、床ずれの日光消毒をしながら、ふと庭に咲く白百合の花の命に出会って、生きていこうと思ったのである。念仏との出会いも、このようなものではないかなと思った。

人は、無心に生きる植物の命に励まされ、生きる勇気を回復するということが、確かにある」

(平成十二年一月十六日、文隆記)

日野敬三氏はどんな小説を書いている方か知りませんが、この文章には何か共感を覚えたんですね。子供の時に絵を描いてですね、その絵が子供の絵にしてはうますぎるし、さびしすぎると言われたという。何かその絵には、孤独というのが顕れていたのではないかと思うんですね。しかもそれが

ポプラの絵なんですね。ポプラは日本にはほとんど見かけない木ですね。でも私の小学校時代に校庭に立っていました。それで共感を覚えたのかもしれませんが。確かに孤独というか孤高というか、そんな感じで立っていました。ことさら寂しさを言い立てたりせず、黙ってじいーっと生きているという感じでした。

そのポプラに、日野敬三氏は何か自分自身を見たんでしょうね。敗戦後日本へ帰って行く時に、焦土の内地で生き直すのが恐ろしかったと。何かそこに萎<sup>な</sup>える気持ちを感じていたんですね。だが途中で貨車の窓からポプラの大木が一本夕陽に輝いているのを見た時、「生きてゆこう」と思ったと。インディアンの戦士の魂は死ぬ時に、自分の場所に帰って一人最後の踊りを踊ると。そのことを思い出して、自分も死ぬ時は、夕陽に輝くポプラの木の下で最後の踊りを踊りたいと書いて文章を結んでいる。

このようにこの人は、子供の時から今日までの一生涯において、気持ちの萎<sup>な</sup>える時、荒野に一本立つポプラを憶<sup>おも</sup>って生きてきたんです。死ぬ時も、ポプラの木の下で最後の踊りを踊って死にたいと。インディアンの戦士の魂は死ぬ時、「自分の場所で」最後の踊りを一人で踊るといふ話を引用している。

ということは、日野敬三氏にとつての「自分の場所」とは、ポプラの木だったということですね。

何か本願力といっても、そういうものではないかなと思います。これがそのまま本願力というわけじゃないですよ。だれども何かね、どう言ったらいいのか…。つまり、経典の中にあつたり、あるいは神仏といわれるようなかたちで自分の外にあるのではなくて、われらの中に平等に与えられている所、また人間だけでなく生きとし生ける一切に与えられている所の、命の静かな深い力というか、そういうものをわれらの中から呼び起こしてくるもの、そういうものが本願力ではないかなと思います。

そういうものは、ポプラを見ても呼び起されるということがあるわけです。ポプラを見て誰もがこんなことを感じるということではないでしょうが、日野敬三氏においてはポプラというものが、自分が萎なえた時に、それを憶おもうことによつて生きていく力を与えてくれるものだったわけです。その力は何か静かな、底力のあるものです。日野敬三氏は、ポプラによつてそういう力を呼び起されてきたということですよ。

普段は意識していかないけれども、自分の中にも深い所に、その力は流れている。どんな人の中にも、深い所に地下水の

ように流れている。そういうものが呼び起されてきた時、我々は萎なえた心が癒いやされて、「生きてゆこう」と思い立つ。これは素朴なもので、理屈とかではない。教義でもないし理論でもない。日野敬三氏においてはポプラというものが、そういう力を呼び起してくれるものだったわけです。

野尻千穂子さんにおいては、この方は後にキリスト者となられたのですが、障害をかかえて十七歳の時に生きてゆく力が萎なえて、もう死のうと思つたんです。そういう時、庭に咲く百合の花の命に出会つて、「生きてゆこう」と思つたと。こういう話をしておられました。

こういう方々の文章とかお話しの中には、辿たどつてゆけばその出所はとても深く果てしないものが流れているように感じます。

観佛本願力 かんぶつほんがんりき 遇無空過者 ぐうむくうかしゃ 能令速満足 のうりようそくまんぞく 功德大宝海 くどくだいほうかい とありますように、本願力に出遇つて我々の中に見出される功德大宝海と言われる功德も、そういうものと別なものではないように思えます。そういうことを、こういう方々の文章とかお話しによつて教えて頂くわけです。

■ Eさんの感話はいつも正直で有り難い。自分はほんとうに

仏法から遠い人間だと言われます。又、Dさんの感話も有り難く聞かせて頂きました。「助かりたいという願いがないから肩が凝らんような話ばかりを聞いたがるんじゃないのか」と人に向かつて言った途端に、「そんならお前にはその心があるのか」という声のどこかから聞こえてきた。そうすると自分にも、そんな心はないんだと気づかされたと話されました。尊いなと思います。「自分には求める心がある」とか、「自分は仏法の器だ」と、そう思っているとしたら、そちらの方がちよつと問題ではないかと思えます。よくよく自分を知らされてみると、本当に自分には求める心がないし、とても仏法の器だとは思えない。でもそれを嘆く必要はないということをおもうんですね。本願というものは、そういうものを私どもに要求しているわけではない。私どもには元々そういうものがないことをよくよくわかった上で、本願を起されている。

■そのことを別な角度から尋ねてみたいと思えます。とても大事なことです。第十八願の中には「唯除の文」というものがあります。第十八願というのは、阿弥陀仏が法蔵菩薩という名前の修行者だった時、一切衆生を救うために建てた根本誓願のことです。

設我得仏 十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法

【書下し文】設い我仏を得んに、十方の衆生、心を至し、信樂して、我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん、若し生まれずは正覺を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除くと。

【意識】たとえ私が仏になることができたとしても、十方の衆生が、真心をもって(至心)、信じ喜び(信樂)、私の国に生まれたいと欲つて(欲生)、ただ念仏して(乃至十念)、それで生まれることができぬならば、私は決して仏になることはありません。ただし五逆罪を犯した者と正法を謗る罪を犯した者はそれから除外します。

これが第十八願の誓いの言葉です。このように法蔵菩薩は、「十方の衆生が至心・信樂・欲生の心を発して念仏して、それで私の国に生まれられなかったら、私は決して仏にはならない」という誓いを建てられた。ところがその後、「ただ

し五逆罪を犯した者と正法を謗る罪を犯した者はそれから除外する」と、例外規定のような言葉を設けているのです。これが「唯除の文」といわれている言葉です。

この第十八願文を普通に読めば、「至心信樂欲生我国乃至十念」は如来が我々に求めている心です。衆生がその心を発して、それで私の国（浄土）に生まれることが出来なかつたら、私は決して仏にはならぬと誓っているわけです。

ところがその後、「五逆罪と誹謗正法罪を犯した者はその救いから除く」という「唯除の文」が続いています。そうすると私どもとしては、何としてもこの二つの罪だけは犯さないようにしなければならぬということになります。この第十八願文を普通に読めばどうしてもそのようにしか読めないわけです。親鸞聖人以外の方はみなそのように読んでいかれたわけです。しかしながらそれでは本願の救いが条件付きということになってしまいます。それで昔から先輩方は、「唯除の文」の取り扱いに随分苦労してこられた。そして最終的には、「唯除の文」を法蔵菩薩の誓願の内容から除外するかたちで読もうとされたわけです。

ところが親鸞聖人は本願文を読んでいく時、決して「唯除の文」を除外されることはなかつたんですね（曇鸞大師も同じ）。

ということは親鸞聖人にとって、この「唯除の文」こそ、本願文を読み取っていく着眼点になる言葉だっただと思うんですね。もつと言うと、親鸞聖人はこの「唯除の文」に、心が釘付けにされたのではないかと思うんです。

先程も申しましたが、第十八願文の伝統的な読み方では、「至心信樂欲生我国乃至十念」は、如来が我々に求めている心です。親鸞聖人以外は、法然上人も含めて、みんなそのように読んでいます。ところが親鸞聖人はこの「至心信樂欲生我国乃至十念」を、法蔵菩薩が我々に代わって発して我々に与えてくださる内容として読まれた。第十八願文をこのように読まれた方は、親鸞聖人以外にはありません。ではどうして親鸞聖人はそのように読むことができたのか。その着眼点になったのがこの「唯除の文」ではないかと思えます。衆生が浄土に生まれるためには、「至心信樂欲生我国乃至十念」はどうしても発さなくてはならない必須要件です。それははずすことはできない。みんなそう読んでいましたから、親鸞聖人も始めはやはりそう読んでいたと思いますね。その上で親鸞聖人は、「至心信樂欲生我国乃至十念」の後に続く「唯除五逆誹謗正法」の言葉を、法蔵菩薩の大事な誓いの言葉として深く読んでいかれた。どうして法蔵菩薩は、一切

衆生を救おうと思いいたれたにもかかわらず、「五逆と誹謗正法の者は救いから除く」と言われたのだろうか。その真意は一体どこにあるのだろうか。

その問いを突き詰めていく中で、親鸞聖人は法蔵菩薩が「除く」と言われた内容について、全く新しい受け止め方をしていかれたのではないか。それはかつて宗正元先生から教えて頂いたことです。すなわち法蔵菩薩が「除く」と言われたのは、「五逆と誹謗正法の者は救いから除く」ということではない。そうではなくて、この者に対しては、「至心信樂欲生我国乃至十念の心を発しなさい」という要請から除くということなのだ。そのように「除く」ということの真意を受け取り直していかれたのではないかというのですね。

つまり五逆と誹謗正法の者に対しては、もう「至心信樂欲生我国乃至十念」を求めないということです。なぜかという、五逆と誹謗正法の者にはそんなことは出来ないからです。そもそも出来ないのです。元々出来ない者に発せと言ったって無理です。だから除くんです。無い者に出せったって無理でしょう。それは要求する方が悪い。だから法蔵菩薩はそういう五逆と誹謗正法の存在を目の前にした時、「出来んお前に要求する私が間違っておった。申し訳なかった。」

だからその要請からお前を除く」と。こういうふうには親鸞聖人は法蔵菩薩のお心を読み取っていかれたのではないかという事です。

浄土に生まれるためには「至心信樂欲生我国乃至十念」の心はどうしても衆生が発さなくてはならない要件ですが、五逆と誹謗正法の者はそれが出来ない。それで法蔵菩薩は、「私がお前に代わって発す。お前には求めない。お前には出来んのためから、私が至心信樂欲生我国乃至十念を全て行じて、そのために兆載永劫の修行をして、全部お前に与えるぞ」と思いいたれたと。こういうふうには全く逆転した読み方をしなされたわけですね。

では五逆と誹謗正法の者ではない者がどこかに居るのであろうか。そう問うてみると、それ以外の者はどこにもいないのです。如来から見たら一切が五逆と誹謗正法の者です。

こういうふうには、通常のオーソドックスな読み方を逆転して読んでいかれた一番のポイントは、「唯除の文」だった。そもそもその着眼点はここだったわけです。もし本願文に「唯除の文」がなかったら、やはり従来通りのオーソドックスな読み方をしていかなければならない。やはり我々は頑張って至心

信樂欲生の三信を發していかなしいけない。千日回峰行のように「至心信樂欲生我國乃至十念」の念仏の行をしていかなければいけない。それを根本からくつがえす存在が、五逆と誹謗正法の存在だったわけですね。

「唯除の文」について、以上のような全く新しい見方をかつて宗正元先生から教えて頂いて、目から鱗が落ちる思いがしました。

ともかく親鸞聖人の著作を読むと、五逆、誹謗正法の存在がわれらだという認識で貫かれています。人間は行も信もできない存在だと徹底して見ておられます。

だからEさんが、自分は仏法の器ではないと言われた言葉は、とても有り難く尊いわけです。そういう者にこそ如来さんは、「あんたの為に私が修行して、南無阿弥陀仏という呼び声によって、行も信も全部を与えるから心配せんでもよい」とおっしゃって下さるわけです。

■本願力ということについてですが、親鸞聖人は、我々が本願に遇って与えられるものは何かということについて、それを「決定心」と「深信」という言葉で明らかにして下さっています。「決定心」とは揺るがない心、それから「深信」と

は深く信ずる心。この二つの心が与えられるということです。では何について揺るがないのか、また何を深く信ずるのか。その第一は「自身」についてだとおっしゃっています。それを「第一深信」という言葉で明らかにして下さっています。

第一深信は決定して自身を深信する。

（『愚禿抄』真宗大谷派『真宗聖典』四四〇頁）

私どもが本願に触れることによってまず第一に与えられるのは、「決定して自身を深信する」心だと。つまりわが身を深く信ずることができると。しかも揺るぎない心で決定して深く信ずることができる。「深信」というのは人間の発す浅信に対するのですね。私どもの発す信心は浅信で、いつもふらふらする。萎えたり、或る時は「生きてゆこう」と思っているも、何かあると、途端に崩れていく。死んだ方がよいとか、もう止めたいと、こういうふうになっていきます。そういう我々が本願に触れると、——ある先生はその本願の心を「選ばず、嫌わず、見捨てず」という言葉で表されていますが——萎えていた自分の心が、本願の呼びかけによって甦ってくる。心が折れて捨て鉢になっていた心が翻されてくる。

具体的には先程の日野敬三氏とか野尻千穂子さんの上にそのことが現れています。二人は本願の教えは知らないと思いますけども、ポプラや白百合の命に触れて、「生きていこう」という力を呼び起されてきた。そこには同じものが流れていると思うんですね。

日野敬三氏は心が萎なえていく時、いつもポプラを憶おもったと。ポプラというのは与えられた命そのままを生きているわけです。風雪のなかで生きています。それは言うならば本願の呼び声ですね。その呼び声が聞こえてきた時に、「生きてゆこう」という心が発おこつてきたわけです。それが「深信じんしん」ですね。だから「深信」というのは本願の呼び声によって呼び起されてきた心です。その本願というのは、どんなことがあっても私どもを「選ばず、嫌わず、見捨て」ない。

私の方は見捨てていきます。でも見捨てていくから駄目だということではない。見捨てていっても大丈夫なんです。私の方は自分自身をも見捨てていくような心しか持ち合わせていない。でもそのことを如来さんはちゃんとわかっている。わかっている、「だから私が見捨てない心を与えるぞ」と、そういうふう呼びかけている。

自分は仏法の器ではないという先程の感話のお話ですが、

本願の方がその私をよく知っていて、その上で誓いの名号を起こして下さっている。だから我々はそういう呼び声の方に帰ればよいわけです。別に自分を仏法の器にしていくことではない。問題は帰るかどうか。そのことが一番大事なことになるのではないかと思うんです。

■資料に張チヤンウエイ偉さんの文章を取り上げています。張チヤンウエイ偉さんは中国の文化大革命でお父さんが犠牲者になって、そのことで深く傷ついて、政治も人間も信じられず、ずたずたの心を抱いて思春期、青年期を過ごした人です。その方が後に野間宏氏を通して親鸞聖人に触れられたんです。現在同朋大学の先生をされています。資料に取り上げたのは張チヤンウエイ偉さんの『海を越えて響くお念仏』という本の一部です。

親鸞聖人の教えは、苦悩するどうしようもない人間のためのものだと思います。人間が絶望のどん底にいるときこそ、この教えは力強く感じられます。(中略)この救済は、普通理解されるような苦しみから救い出すということとは違います。それは苦悩のままの救いです。たとえて言いますと、一人で海の中を泳いでいるうちに、大船たいせん

が現われて救われる、というふうに言えましょう。(中略)  
その大船は、海の上に浮かんで溺れそうな人を海から救い出すのではなく、海より大きくて、もがいている人間と海そのものを載せている大船だというほうがよいと思います。「南無阿弥陀仏」という救済には、合理主義によって育てられた人間心理と異なる人生感覚があると思います。(『海を越えて響くお念仏』十八頁〜十九頁)

この文章は親鸞聖人の「ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」(真宗大谷派『真宗聖典』一四九頁)という言葉について語られたものです。

この人の実感というものには共感しますね。通ってこられた苦しみが非常に深い。解決がつかような苦悩じゃないんですね。そのような解決がつかないような苦悩の中で、親鸞聖人の「難度海を度する大船」という教えを頂いておられる。「難思の弘誓」とは本願のことですね。また「難度海」というのは渡り難い海のことです。なだらかな海ではなくて、荒れ狂った海。私どもの人生のことですね。私どもの人生というものは、本当に色々なことがあるわけです。そして最後は空しく死んでいくんです。どんなことがあったといっても、

結局「何があったのか、夢のまた夢ではないか」と言って、空しく終っていくわけでしょう。そういう私どもの人生の全体を「難度海」というのです。

しかし本願はそういう難度海を度する大船だと。この言葉をそのまま読むと、難度海の上を渡っていく船だと、こういうふうに読めるんですけど、それを張偉さんはもつと深く読んでいますね。「その大船は、海の上に浮かんで溺れそうな人を海から救い出すのではなく、海より大きくて、もがいている人間と海そのものを載せている大船」だと。つまり苦悩の海に浮き沈みしている人間だけを海から救い出す、そういう小さな船ではなくて、浮き沈みしている人を、浮き沈みさせている海丸ごと載せていく、そういうとてつもなく大きな船だと。それで大船というのですね。だから念仏の救済には、「合理主義的によって育てられた人間心理と異なる人生感覚がある」、というふうにおっしゃっています。

そういう大船があるということは、自分が人生を引き受けていく人間になる必要はないということでしょう。自分が人生を引き受けていく人間になるといふことになると、これは中々大変でしょう。私はちよつとしんどい出来事に遇うと、すぐに引き受ける気持ちは萎えていく。つねに萎えておると



いってもよいですね。だから引き受ける心を自分に発せ（おこ）  
いたらね、これは難行（おこ）になつていくんですよ。だけでも「そ  
ういうような心が発（おこ）らんでも心配ないよ」と。要するに本願  
の方が捨てんのですから。自分の方は捨てる心がしよつちゆ  
う起こってくる。自分の方は「深信（じんしん）」じゃなくて浅信（せんしん）なん  
です。浅い信しかありませんけど。或る時は信じられるけ  
ど、或る時はもうすぐ崩れていく、こういう浅信（せんしん）。だけでも  
「それではいけんよ」というのではなくて、そういうことを  
如来さんはちゃんと知っておつて、で如来の方が捨てないん  
です。どんなことがあつても。だからその如来に帰ればよい  
のです。それが大船（たいせん）です。

自分がそういう心を起こさんでもよい。如来さんの方が、  
どんなことがあつても捨てないわけですから。「生き残らん方  
がよかつた、死んだ方がよかつた」と思えるような辛いよう  
なことがあつてもです。そういう辛いことが人生にはある。  
けれどもそういう難度海（なんどかい）である人生全体を、如来さんの方が  
見捨てないわけです。「もがいている人間と海そのものを載（の）  
せている大船（たいせん）」である如来さん。その如来さんの方に帰ればよ  
いんです。

こういうことが本願力という言葉から教えられることです。

そういうものに出遇わなかったら、私どもの人生は、たとえ  
どんなことがあつたとしても、全部空しく終つてしまうとい  
うことです。このこと一つを、大石先生のお母さんも蓮如上  
人も、何十年と生きてこられた人生を振り返りながら、しみ  
じみとおしゃつておられるというふうに思います。

■それから書信の一二九頁ですが、

私は母の挨拶の声を隣できいて、この言葉は、人  
間の耳を通し、目を通して得た世間智（しゃんぢ）から出るものでは  
ない、外界から眼（しやたん）が遮断（しゃたん）され、耳（しやたん）が遮断（しゃたん）されても関係の  
ない、もつと深いところから、人間以上の声が出るのだ  
と思ひました。（『大石法夫先生直筆書信集』上巻二一九頁・

樹心社刊『生まれてよかつたですか』一〇九頁）

こういうことをおしゃつておられます。つまり出所ですね。  
こういうお母さんの言葉の出所。私どもは世間の中で生きて  
いると、いろんな事を覚えたり勉強したり経験したりして知  
つていきますけど、そういうものではないということ。知  
たとえ目が見えず耳が聞こえんでも関係ないと。この世で得  
られた知識よりも深いところに出所がある。人間以上の「も

つと深いところから、人間以上の声が出るのだと思いました」と、このように大石先生はおっしゃっています。

この出所ということについて、これに近いことを親鸞聖人のお言葉に尋ねていきますと、『教行信証』の「行巻」に、

良に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けな  
ん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖きなん。能所の  
因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらざは  
光明土に到ることなし。真実信の業識、これすなわち  
内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外  
の因縁和合して、報土の真身を得証す。

『教行信証』真宗大谷派『真宗聖典』一九〇頁

このようなお言葉があります。光明と名号は最終的には外縁  
なんですね。そう親鸞聖人はおっしゃっています。名号が父親  
で、光明が母親で、この父親と母親によって子供が生まれ  
きます。この子供というのが信心だと。それを「信心の業識」  
というように言い方をしています。そして信心の子、すなわ  
ち「信心の業識」が生まれたら、これが内因となつて歩みを

始める。そして光明と名号は外側からその信心の子供を護り  
育てる外縁となつて下さるのだと。このお父さんとお母さん  
に信心の子供は育てられて、命ある間は歩んでいって、そし  
て命終る時に、この信心が「報土の真身を得証す」と。すな  
わちお浄土に生まれて仏様の身となるのだと。光明と名号は  
外縁なんですね。名号のお父さんと光明のお母さんから生ま  
れてきた信心の子、これが本当の因で、光明と名号は外縁な  
んだと。そういうふうに関親鸞聖人はおっしゃっています。

大石先生が、世間智からじゃなくてもつと深いところから  
出ているというふうにおっしゃっておられる、その「深い所」、  
出所はここなんです。真実信の業識、これすなわち内因と  
すの「内因」

だから我々が呼び声に触れて、「なるほど」と、胸にこう感  
じるものがありますでしょう。それは私自身の内の深いところ  
に、そう感じるものがやっぱりあったんですね。出所は私  
自身の深い所にある。

私自身といつてもね、「私」の中ということではないですよ。  
自己というのは、二重構造ですから。「私」と「身」の二重構  
造。だから「私」の中にあるわけじゃないです。「この身」、  
私どもが等しく頂いている「この身」の深い所からです。「業

識」というふうな言い方を親鸞聖人はなさっています。「業識」とは様々の業を経廻つてきたということです。「この身」は無始以来の迷いの歴史をかかえている。それを「宿業の身」というふうに言う。そういう「宿業の身」から生まれてくる信心です。それと離れず、その中から生まれてくるような信心ですね。

私どもは色々迷いを持つけれども、自分からは手の届かないような深い所に、そういうことを感じる深い心を持っている。それを持つていない人は誰もいない、誰も。だから呼び声に触れると、そういうものが触発されて顔を出してくる。大石先生のお母さんもそういう呼び声に触れて、「この世に人間として生まれてきた本懐を遂げた」と、こう言えるものが生まれてきたわけですね。

仏法は毛穴から沁みこむという言い方をよくされますけれども、理屈は解らんでもですね、この身はそういう深いものを間違えなく持っているわけです。自分で作ったものではないので、自分のものというわけにはいかないけれども、呼び声が毛穴から沁みこんで、自分の内にあつた深いものが呼び起されて、顔を出してくる。つまりこの身の深い所に眠っていたものが開発されてくる。それが信心です。それが私ども

の内因です。親鸞聖人は「真因」というふうにも言われています。これが清沢満之先生が「自己とは何ぞ。これ人生の根本問題なり」と言われた所の自己だと私は思っています。そういう自己が自覚されてきた時、「生まれてきてよかつた」と心の底から感じる。そういう尊いものをこの身は持つて生まれてきている。だからこの身ほど尊いものはない。そういうことを「信心の業識」という言葉によって教えて頂きます。

こういうように、大石先生のお母さんの言葉の出所というものは、大石先生が言われていますように世間智ではないわけですね。私自身の宿業そのものの中に、そういうものが内包されている。そういうことを思います。

今日の書信の中には、外にもいろいろとを感じる所は多いんですけども、時間が来ましたので一応これで終りにしたいと思います。(発題終り)

### 【座談の部(抜粋)】

■(A) 生死を離れるとは？

(B) 大石先生の「光あり」の歌に



## (宮岳)

「生死のきずなは断ち切られ」とありますが？

生死とは迷いということ。生死流転と言います。迷いが尽きずに流転していくということ。それで生死を離れるとは、その迷いの苦しみから解放されるということになります。それを生死出離という。生死出離を文字通りに読めば「生死を出で離れる」ということです。しかし言葉は簡単ですが、それから出られるかというのと、どうしても出られない。それで苦しむわけです。それを生死の苦しみという。だから生死の苦しみから解放されるとは、生死を出られないのに出ようとしていた、その苦しみから解放されるということです。

ある方からの年賀状に、「逃げようと思えば思うほど、追っかけられて苦しい」というものがありました。出ようとすればするほど、苦しむのです。だから生死出離ということは、通常は「生死を出離する」と読むのですが、それでは逆に生死の苦しみから解放されることではない。それである先生（宗正元師）は「生死に出離する」と読んでおられた。なるほどなと思いました。「生死に出離する」。生死を逃げる心から生死に出離する。生死の身に帰るといふことです。今自分の受けてる

生死の身が、どんなに尊いかということを知らずに、嫌悪するしかなかった。それが翻された。そしてこの生死の身を深く頂くことが出来る。それを「生死のきずなは断ち切られ」というのだろうと思います。

生死から逃げたいと思っている心は、宿業のわが身を上から眺めて嫌っているわけです。それは非常に傲慢な心であるわけです。その高上った心が翻され、破られて、自分の受けていている生死の身を、先程のご婦人が言われていましたように、「人生無駄な事は何ひとつないのですね」と頂いていく。

今起こっている様々な悲惨な出来事は、顔をそむけなくなるような受け入れがたいものが多いですが、でも難度海の人生には、そういうことが起きるわけでしょう。普通の価値観からは、とんでもない話ですが、王舎城の悲劇がそういうものだったでしょう。我が子が反逆して夫は殺され、自分は幽閉され、「何でこんな目に遭ったのか」と嘆くわけです。しかし親鸞聖人はその出来事を非常に深く頂いておられる。

ともかく「生死出離」とは、「生死に出離する」ということだと思えます。

(B)

先日、交通事故死の現場に遭遇しました、思いもよらぬミスで起こり、しかも近所同士でしたから、加害者と被害者が近隣で暮らしているわけで、加害者の置かれた苦しみは本当に針のむしろの苦しみです。また被害者の家族も、「どうしてこんなことになったのか」と、どうしても受け入れることが出来ずに苦しんでいる。双方とも、その置かれた苦しみを思うと、本当にどうにもならないものを感じます。そういう抜き差しならぬ苦しみを目の当たりにすると、生死しょうじを出離するといっても、実際はどうしたらいいのかと思う。

(宮岳)

本願の教えというものは、そこをくぐっているわけです。仏教は元々生死しょうじを出離するという道です。ところが実際は非常に難しい。どうしても出離出来ないという身の事実には直面する。人生は本当に一筋縄でいかないことが多い。今言われたような出来事が次々に起こってくる。ではどうするかといっても、どうにもならん。逃げようとしたって、逃げられない。Bさんも言われていたように、せめて時が過ぎて忘れることを待つ。でも本当に苦しい時は、そこで時が止まって、忘れることもできない。そういうのを難度海という。

だから生死は出離できないということです。ところが本願というのは、そういうわれらを見捨てないんです。そういうわれらと身の一つにしている。

先程Eさんが感話で話された悩みは、実は私の問題でもあるわけです。私自身そういう仏法の器からは遠い。そういうものを自分に求めようとしても、挫折していく。だけでも本願の方は、そういう私を見捨てない。自分の方はそんな自分なんてまっぴらなんです。本願の方はそういう私を見捨てない。どういふ私であろうと、どういふ人生であろうと、見捨てない。そういう本願の方に帰る。

(C)

今の事故の話で思うのですが、加害者は何かにつけ、世間から「あの人は事故をした」と言われる。私たちにも「あの人は事故をした」という心がどこかにある。私にもそれがある。そしてそれが何かの時に顔を出す。これは事故のことだけを言っているのではないんです。色々な犯罪の場合もそうです。あの人はやった。自分はやっていない。その「自分には非がない」という意識の冷たさ。それがどうしようもなく私の中にもある

のを感じる。これは一体どう考えたらいいのか。

- (D) 父親が約四十年前に事故死しました、相手の方が加害者で、長い間もやもやした気持ちでした。大石先生に出遇って四、五年過ぎた頃に、先生のお慈悲のお陰と思いますが、「相手の方も長年、十字架を背負って生きてきたんだなあー」と、ふと思えて、その人と思う心が変わりました。宿業というか、もし相手が仏前にお参りに来られれば、ゆっくり話をしたいと今は思う。でもそう思えるのに三、四十年かかったということですね。でもやっぱり忘れるということはないですね。こういう話になると、ふうつと色々な思いが出てきます。

(C) それは自分に非がない場合の話でしょう。

(D) いや百パーセント非がないとは言えない。今思えば父親にも不注意があったから事故に遭ったと思う。

(C) 加害者が救われるとはどういうことか。例えば、思わず人を殺めてしまって苦しむ。そういう場合、自分で「業ねはんぎょうです」とは言えない。そこはどうなるのか。『涅槃経ねはんぎょう』には父王を殺した阿闍世あじやせが助かっていった物語が出ていますが、それを思うと韋提希いだいけから阿闍世あじやせの方へ救いの物語が移ったというのは、深いですね。

(D) そうですね。父王を殺さなかったら、阿闍世あじやせも救われてないからね。

■ (A) 「生死しょうじに出離する」ということは、生死しょうじの中で日々生きていく、その中で出離するということですか。

(E) 生死解脱しょうじげだつとよく言いますね。あれと違いますか。

(官岳) 生死解脱しょうじげだつと言っても、生死しょうじしていることがなくなるということではない。どうしても我々はそう思ってしまうがちですが、生死しょうじに帰れるということではないかと思えます。

(E) あつ、そういうことですか。

(官岳) 生死しょうじがなくなることはないでしょう。生きていくことが生死しょうじだから。もし生死解脱しょうじげだつということがそういう意味なら、人間をやめるしかない。生死しょうじが渦巻いていく身、そこに解脱げだつしていく。それは自分で出来るわけではないが、少なくとも本願はその生死しょうじを引き受けている。決して見捨てないんです。それを功德大宝海くどくだいほうかいという。我々は生死しょうじの身を逃げたいんですね。でも自分の身だから逃げられんですね。本願はそういう身を引き受けて、逃げずにそこに居られるんですね。その本願の呼びかけに帰る。

日野敬三氏においては、ポプラの姿から、ある意味でそのような本願の呼びかけを受けて、萎なえてゆく心がひるがえ翻ひるがえされて「生きていこう」と思った。我々も、生死しやうじに倒れそうになって、死んだ方がいいとか色んなことを思う時に、それを黙って引き受けているものに触れると、同じようなことが起る。

本願力といっても大々的なものではなくて、そういう目立たないものではないかと思えます。静かに引き受けている、善し悪しを言わずに。悲惨なこともそのまま引き受けている。身とはそういうものですね。身は、黙って引き受けていくじゃないですか、悲惨な中でも静かに。頭の方はのた打ち回っていても、身の方は静かに引き受けておりますよ。心が動転している時は、そういうことには目が行きませんけどね、だけでも、ふとした時にそんな力の端っこでも触れると、解決がつかんでも、解決がつかないままに、何か心が立ち帰っていくような、そんな経験をするわけです。

(A) 或る医師で癌を患いながら短歌を作っている方がおられて、次のような歌を詠よんでおられます。「生も死も忘りるることが 両忘りやうぼうと 言いつつ 友は闊達かつたつに生く」

私はこの歌のような生き方が生死しやうじを離れることかと思  
うんですが、そういうことですかね。

(官岳) 実は私も、最近禅宗のあるご老師(村上光照老師)から、次のような心境表現のお葉書を頂きました。

「生死しやうじの中に佛あれば、生死しやうじなし」

地震に遊び、津波に遊ぶ。災害・苦難。

波浪はろうの浮沈ふちん、遊泳ゆうえい悠ゆるかなり。

如来にょらい光明くわうみやうり裡、陰翳いんえいを、のこさず。

「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。

死ぬる時節には、死ぬがよく候。

これ、災難をのがるる妙法にて候」良寛

立春 芽ぐみの萌もし 光照 拜謝はいしや

人間の考え方からすればこういう世界はとんでもない  
ということになるでしょうが、幸不幸にとらわれる人  
間の目を離れた大きな世界から、私どもの存在を受け  
取り直すと、本当にこの通りだと思っうんですね。見出  
されてきた智慧の世界だと言っうていいかと思っいます。

禅宗の方はこんな境地でしょうか。大変な行をくぐ  
って到達されたと思っいます。凡人の我々がこの様な境  
地を自分で得ようとするとなり易な事ではない。やは

り難行になっていきます。でも自分の身はすでにそういう世界を生きています。

(C) 「両忘」<sup>りょうぼう</sup>、生も死も共に忘れるということは、私どもはいつも生死<sup>しじゆう</sup>を意識しているが、そういう執着を離れることかと思っただんですが、そういうことですか。

(宮岳) そういうことでしようが、我々が自分でそうなるうとする、中々なれん。「いつかなれるだろうか」と期待しながら、終には死んで行くことなると思うんです。

(C) でも安田理深先生は、執着を離れるということが一番大事なことで、執着を離れるということは、執着していることを知ることやと、そう言われた。

(宮岳) そうそう、そこなんです。執着<sup>しやく</sup>していることを知ることです。知るとは、領<sup>うりやう</sup>くということ。そういう身に帰るといことです。執着を離れられない身に帰る。自分では決して帰れんわけですが、身の方は、すでにそのままを引き受けている、静かに。そういう世界に触れると帰っていいける。

私は父親が生きている時は中々父親に出遇えなかった。だけでも亡くなつていく時の姿、本当に静かに命を終っていった時の姿を今よく思い出す。その姿の中

に、私の存在を静かに引き受けてくれる命というものを感した。

その命はどの人の身にも有る。先程のご老師のように高い境地を得た人にも有るのでなくて、愚痴ばかり言っている私の身の中にも有る。愚痴ばかり言っている中で、そういう命を持った身というものをどこかで感じたなら、愚痴ばかり言っている身に帰っていいける。自分からはそんな身には帰れるものではないが、父親の最後の姿に頭れていたような、愚痴のまんまの私を静かに引き受けてゆくはたらきをどこかでふと感じると——それが呼びかけだと思っただけ——愚痴ばかり言っておる身に帰っていいける。

自分の中からは出て来ないが、大石先生とか、同行さんとか、——そういう身を生きておられ御同行さんが沢山おられるでしょう——私もそういう同行さん方に随分触れさせて頂いてきましたけど、そういう方々が、さつき言ったような静かな力というものを顕わして下さっていると思っいます。(座談の部、終り)